

平成29年1月4日（水）

老球の細道294号

我、まだまだ老いず！

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「毎日が大晦日、毎日がお正月、毎日が誕生日！」をモットーにしながらも、なかなかその境地で生きることができずに早62年。今年もさらにその境地への想いを強くして2017年をスタートした。世間では、初詣を終えて一家団欒ゆっくりとお正月を楽しみ、仕事始めとあいなったことか。スポーツ界は年末から年始にかけては全国大会が目白押し。全国サッカー選手権、全国ラグビー選手権、そして全日本実業団駅伝、箱根駅伝。バスケットボールにおいても元旦から全日本選手権（オールジャパン）が始まり、トップアスリートたちは盆も正月もないのが世の常である。

そんなことを思うと正月だからといって家でのおんびりなどしてはいられなかった。子どもたちを引き連れて元旦バスケットボールに出かけたり、誰もいない道路をジョギングすることが私自身の正月の変わらぬルーティーンである。退職の頃、会津高校、坂下高校時代の教え子たちが集まって3：3のゲームをしたのは懐かしい思い出である。日頃ゆっくりとしか走っていない私にとっては苦行に近かったが、とても楽しかった。なんとか乗り越えられたのは、教え子との久しぶりのゲームとアンチエイジングへの挑戦があったからである。郷ひろみ、三浦雄一郎に負けるな！と。

日本のお正月に欠かせない風景は世界遺産になった「富士山」。そして富士山といえればその風景画で一世を風靡した葛飾北斎である。73歳で完結した「富嶽三十六計」、75歳で発表した「富嶽百景」は北斎晩年の傑作であり、ヨーロッパの画家ゴッホやゴーギャンにも大きな影響を与えた。

以前読んだ『年齢の話題事典』（東京堂出版）に、北斎のプロフェッショナルとしての心意気が記されていた。

「自分は6歳ごろから物の形を写しとってきた。50歳頃からいくつも絵を世に出してきた。だが、70歳前に描いた絵はなんとも物足りない。73歳になってようやく動物、植物の構造や成り立ちがいくらかはわかるようになってきた。それゆえ、86歳になれば今より絵は上達するだろう。90歳になれば絵の奥義もわかってくるだろう。100歳になれば画業も神妙の域に達するだろうか。110歳になれば描いた1点が一つの命を得たかのようになるだろう。長寿を司る神様には、この私の話がいつわりの世迷い言ではないことをご覧いただきたいものである」

当時の北斎は超一流の浮世絵師として世間に認められていたが、そこに安住する気などみじんもなく、さらなる高みを目指していた。79歳のときには火災にあい、70年以上描きためてきた写生帖も消失してしまった。そのとき北斎は「私にはまだ筆が残っている」と気丈にも言っただけという。死ぬ間際になっても「天が私に、せめてあと10年、いや5年でも長く生きながらえさせてくれるなら、真の画家になれるだろうに……」と最後まで創作への執念が消えることはなかった。

なんの世界でも、高みを目指す人たちは年齢を言い訳にはしない。むしろ年齢が熟することによって、さらにその道を極める心意気を持つ。年末、インフルエンザによってリズムを崩されたが、夢と希望が最高の免疫であり、アンチエイジングであることに気づいた。